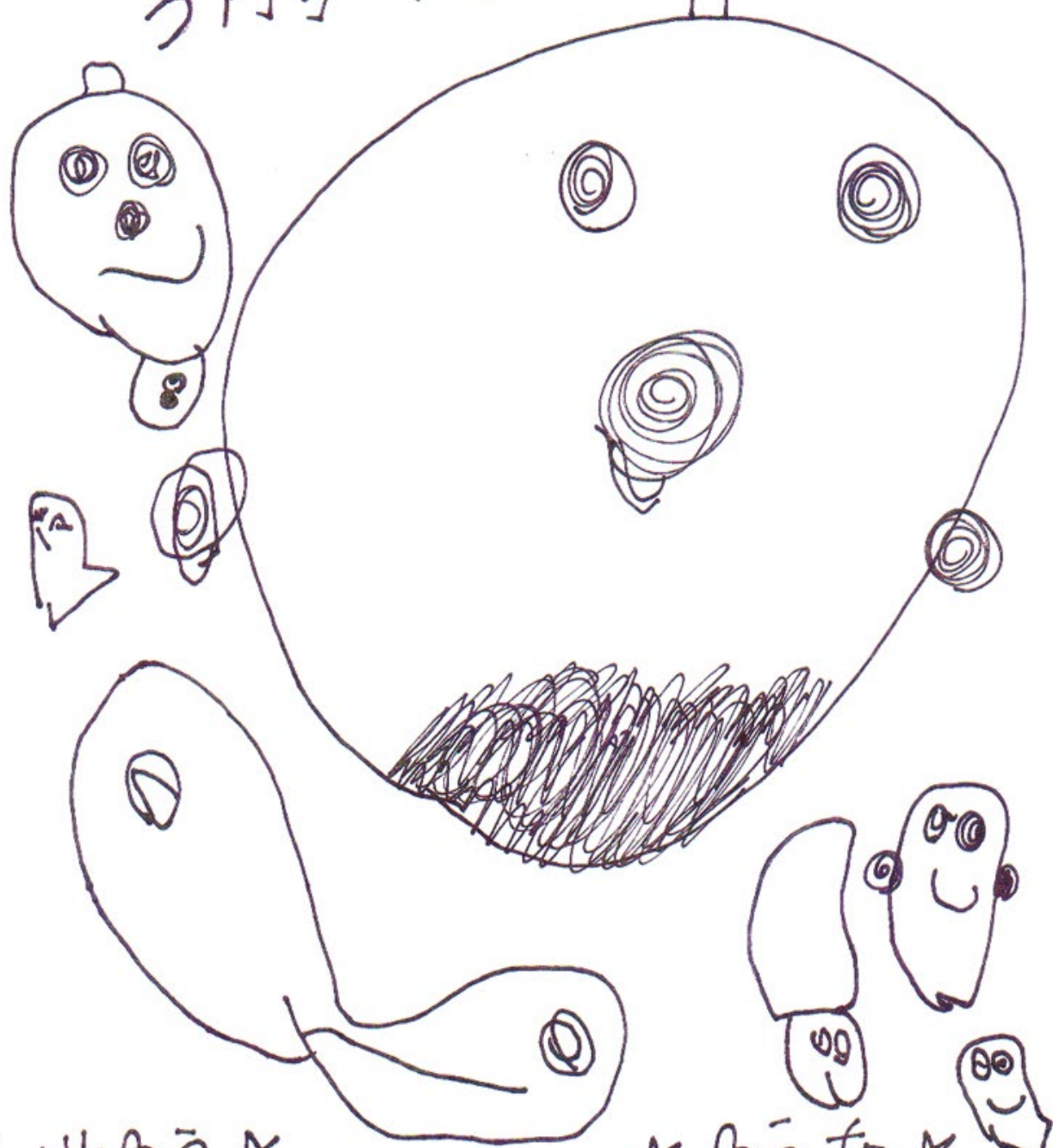


とよ・たち  
美肌通信  
3月号 VOI.92



★じゆう★

★ゆうあ★



# 3月号の表紙



あたたかい日が多くなり 気持ちのよい  
季節になってきました！ 今日号の表紙は、  
そんな春らしさがある 明るく楽しそうに  
あそんでいる絵です！ いっぱい お友達も  
いて、楽しそう 😊

ドライブに行く事や、気持ち良く寝る事が  
好きで、お菓子作りが得意な男の子が  
描いてくださいました！ ありがとうございます。

院長 はじめ スタッフ一同

心より感謝いたします！



今までに何度か書いたことがあると思いますが、  
論語の中の雍也(第六篇)の一節に、之を知る者は之  
を好む者に如かず。之を好む者は之を楽む者  
に如かず「知好楽」、という節があります。訳は、  
それを知る者は それを好んで行う者に及ばない。  
それを好んで行う者は それを楽しんで行う者には  
及ばない、という事でありなる程と思わざるを得  
ない。しかし、楽しんで行う者のそれより更に上に  
もう一つの境地があるという。それが「遊」である  
とある本に書かれていた。

知には、無知、好きには嫌い、楽には苦と  
いう様に「知好楽」には相対する世界がある。  
しかし「遊」には相対するものが無い。それは絶  
対の境地であるからだという。ここに至る事は  
尊く孔子や釈迦やキリスト、いやそこに至らずとも、  
その道のプロと言われる人々の天命を悟った仕事には  
「遊」の境地というものがあつたのだと容易に想像  
する。では、「遊」とはいかなるものか。漢文学の白川  
静氏によれば、遊とは神遊ひが原義で神と  
共に存在する状態のことだという。

決して現代の一般的な余暇を過ごしたりする遊ひや暇潰しではない。「遊」は子供のあそぶ姿に如実に表われる。あそんでいる子供はどくなあそびであれそのあそびと一体になっていて、夢中であり無心である。

先述の「遊」と意を同じくして、「礼記」という書の中の「学記」に、学問には<sup>蓄</sup>学（知識を蓄にしまひ込む様に学ぶ）、修学（集めた知識を整理し自分のものにする）、<sup>息</sup>学（呼吸をするのと同じ様に無意識な位に学問が自然になる）、更に最終型として学問が体に自然と溶け込み自身と学問が一体になるという意味の「<sup>ゆう</sup>学」があるという。

私なりに思うのは、その域まで達する人はその道を極めた達人であり一様にその仕事を遊んでいる様な風情が他者からみても感じとれるものだと思う。その根底にはその仕事を天命と思ひ、ひたむきに、一途一心に、長年にわたり真摯に真剣に必死に歩んでゆき、人格を形成していったのだと推察する。

そう言えば、祖父も昔私に似た話をしてくれた。「50・60 鼻たれ小僧、70・80 働き盛り、90 なって迎えが来たら、100 まで待てと追り返せ」。おそらく祖父もどこかの書物から得たものであろうが、「遊学」の意味を知り祖父のこの言葉を思ひ出した次男です。

院長、拝